

# 台風19号災害支援ボランティアに参加した学生の

## 参加の目的と経験

### —留学生と日本人学生の比較から—

瀬尾 匡輝 \*

(2020年11月9日受理)

## The Purposes and Experiences of Students Participating in the Disaster Relief Volunteer Activity for the Typhoon Hagibis: Comparison between International Students and Japanese Students

Masaki SEO\*

(Received November 9, 2020)

### Abstract

Through the interview conducted on Japanese students and international students who participated in the disaster relief volunteer activity for the Typhoon Hagibis in 2019, this paper compared the differences in the purposes and experiences of volunteer activities between Japanese students and international students. As a result, both Japanese students and international students participated in this activity by accepting the request from the university. Before participating the activity, although they were interested in volunteering, they had no information and were unable to participate. However, as the university actively informed about the volunteer opportunity, students were able to know. Both Japanese students and international students thought that their experience of participating in the activity was meaningful that they could gain experiences that they could not have in their daily lives and to interact with people who were not in contact on a daily basis. Furthermore, as international students wanted to gain a variety of experiences while studying in Japan, they participated in the disaster relief volunteer activity as they thought it was a culture unique to Japan.

【キーワード】 台風19号、災害支援ボランティア、参加の目的と経験、留学生と日本人学生の比較

---

\*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

## 1. はじめに

ボランティア元年と言われる 1995 年の阪神・淡路大震災以降、ボランティア活動に対する社会的関心が高まり、2000 年代以降ボランティア活動を取り入れたサービス・ラーニングが教育現場でも取り入れられるようになってきた。しかしながら、留学生とボランティアの関係に目を向けると、松永 (2016) が指摘するように、留学生はボランティアで支援される側と捉えられる傾向があり、留学生のボランティア活動参加の目的や経験が十分に議論されているとは言い難い。そこで、本稿では、2019 年の台風 19 号の災害支援ボランティアに参加した日本人学生及び留学生にインタビュー調査を実施し、かれらのボランティア参加の目的と経験を比較し、日本人学生と留学生のボランティア参加の目的と経験にどのような違いがあったのかを明らかにする。

## 2. 調査の概要

### 2.1. 台風 19 号災害支援ボランティア

台風 19 号 (令和元年東日本台風) は、2019 年 10 月 6 日に発生、10 月 12 日に日本に上陸、関東地方や甲信越地方、東北地方に大きな被害をもたらした。全国で死者 105 名、行方不明者 3 名 (茨城県内では死者 2 名、行方不明者 1 名) と、2000 年代に入ってから日本の台風被害では最悪のものとなっている (消防庁応急対策室 2020)。茨城県内においても、久慈川、那珂川、久慈川支流の里川、那珂川支流の藤井川で堤防が決壊し (『東京新聞』2019.10.16 ウェブ版)、住宅の全壊 146 棟、半壊 1,590 棟、一部破損 1,721 棟、床上浸水 104 棟、床下浸水 443 棟の被害をもたらした (茨城県災害対策本部 2020)。

茨城大学では、台風 19 号で被災した人々を支援するために、台風上陸の 4 日後の 2019 年 10 月 16 日に学生を対象としたボランティア活動の説明会を行った。そして、説明会には約 250 名の学生が参加し、その後 10 月 17 日・18 日に水戸市災害ボランティアセンター本部 (渡里町)、10 月 20 日に常陸太田・常陸大宮でのボランティア活動に向かう学生のために、バスによる送迎を行った (詳しくは、茨城大学 2019)。ボランティア活動には、茨城大学の留学生も参加していた。筆者は、茨城大学グローバル教育センターで留学生に対する日本語の授業を担当しており、授業でかれらが災害支援ボランティアに参加した話を聞き、かれらがなぜ活動に参加しようと思ったのか、そして活動を通してどのような経験をしていたのか探りたいと思い至った。そして、調査を進めていくなかで、かれらの活動参加の目的と経験は日本人学生と異なるのかに興味を持つようになった。

### 2.2. インタビュー調査の概要

調査では、台風 19 号の災害支援ボランティアに参加した日本人学生と留学生に対してインタビュー調査を行った。日本人学生については、大学を介して災害支援ボランティアに参加した日本

表 1 調査協力者 (日本人学生) の概要

	所属学部・研究科	学年 <sup>1)</sup>	ボランティア先	これまでのボランティア経験	インタビュー日
1	人文社会科学部	学部 4 年	常陸太田市	あり (募金活動のボランティア)	2020 年 6 月 5 日
2	理学部	学部 4 年	常陸太田市	あり (教育ボランティア)	2020 年 6 月 8 日
3	人文社会科学部	学部 2 年	太子町、水戸市、常陸大宮市 (2 回) の計 4 回 <sup>2)</sup>	あり (東日本大震災の支援ボランティアのサークルに参加)	2020 年 6 月 1 日
4	教育学部	学部 2 年	日立大宮市	なし	2020 年 6 月 3 日

人学生 22 名のうち 4 名に対してそれぞれ約 60 分の半構造化インタビューを 2020 年 6 月にオンライン上で行った。表 1 に調査協力者（日本人学生）の概要を記す。調査協力者の性別は全員男性である。

留学生については、大学を介して災害支援ボランティアに参加した留学生全員（6 名）に対して、2020 年 1 月にそれぞれ約 60 分の半構造化インタビューを対面で行った。表 2 に調査協力者（留学生）の概要を記す。

表 2 調査協力者（留学生）の概要

	所属学部・研究科	学年	出身国	性別	ボランティア先	これまでのボランティア経験	インタビュー日
1	理工学研究科	博士 2 年	中国	男性	日立大宮市	なし	2020 年 1 月 15 日
2	人文社会科学 研究科	修士 2 年	中国	男性	日立大宮市	なし	2020 年 1 月 16 日
3	理学部	学部 3 年	中国	男性	日立大宮市	なし	2020 年 1 月 17 日
4	農学部	学部 1 年	中国	女性	日立大宮市	なし	2020 年 1 月 17 日
5	交換留学生※		インド ネシア	男性	水戸市	あり（子ども向けの キャンプでのボラン ティア）	2020 年 1 月 20 日
6	交換留学生※		マレー シア	男性	水戸市	あり（老人ホームで のボランティア）	2020 年 1 月 14 日

※ 1 年間茨城大学に交換留学生として在籍していた。

データの分析では、インタビューを書き起こしたものを読み込み、調査協力者のボランティアに参加した目的を、以下に示す高木・玉木（1996）の災害支援ボランティアに参加する 7 つの動機とそれ以外の動機に分類し、それらの関係を分析した。高木・田牧（1996）の 7 つの動機とは、

- ① 共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容（「被災者が気の毒に思えたので」「自分が援助しなければならなかったと感じた」「自分が思いやりのある愛他的な人間だから」など）
- ② 好ましい援助・被援助経験（「以前にこのような経験をして良い気持ちになった経験があったので」「今までに誰かに援助されて助かった経験があったので」「今までにこのような援助を行った経験があったから」など）
- ③ 利得・損失計算（「援助すれば何らかの報酬や返礼が期待できたから」「援助しないためにこうむる犠牲が大きかったから」など）
- ④ 被災地や被災者への好意的態度（「被災地の神戸やここに住んでいる被災者たちが好きだから」「被災地に知り合いがいたから」など）
- ⑤ 援助要請の応諾（「援助するように直接誰かに頼まれたので」「特にはっきりとした目的もなく」など）
- ⑥ 良い気分の維持・発展（「援助しようとする人が自分の周りにはほとんどいなかったの」「援助しようと思ったときに気分が良かったから」「他者の目が気になったので」など）
- ⑦ 被災地との近接性（「自分が被災地の近くに住んでいるので」「自分の援助が被災者や被災地にとって何か役に立つと思ったから」など）

である<sup>3)</sup>。そして、災害支援ボランティアの経験については、すべてのインタビュー・データを書

き起こしたものを読み込み、調査協力者の災害支援ボランティアの経験についてのカテゴリーを生成し、それらの関係性について分析をした。また、ボランティア活動継続の有無も尋ね、その後のボランティア活動の経験や参加に対する意識についても分析をした。

### 3. 分析

#### 3.1. 日本人学生のボランティア参加の目的と経験

日本人学生の調査協力者の4名のうち3名は台風19号の災害支援ボランティアに参加するまえにボランティア活動をしたことがあった。日本人学生3は、大学に入学する1年前に「西日本豪雨<sup>4)</sup>」を経験し、(高校生であったことから)何もできなかったため、「大学に入ったら何かをしたい」と考え、東日本大震災をきっかけに設立された復興支援を行うボランティアサークルに参加していた。しかしながら、震災から約8年が経過した今では、サークルは復興イベントや震災学習の企画や運営を行っており、被災地のがれきの除去、清掃、泥だしのような初期段階の支援は行っていなかった。それゆえ、今回の台風19号の災害支援ボランティアのような初期段階の支援への参加は初めてだった。また、他の2名は「夏休みに自主的に公民館に集まった中学生に英語や数学を教える」教育ボランティア(日本人学生2)をしたり、「水戸ホーリーホックの選手と(ケーズデンキスタジアムで)お客さんに募金をよびかけ」るボランティア(日本人学生1)をしたりしていた。しかしながら、復興支援を行うボランティアサークルに参加する日本人学生3も含めて、「②好ましい援助・被援助経験」から災害支援ボランティアに参加した調査協力者は皆無であった。そして、「①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」、「③利得・損失計算」、「④被災地や被災者への好意的態度」、「⑥良い気分の維持発展」から参加した者もいなかった。では、なぜかれらは災害支援ボランティアに参加したのだろうか。

まず、日本人学生3が災害支援ボランティアに参加したのは、前述した西日本豪雨が強く影響を与えているようだった。かれは西日本豪雨が被害をもたらした中国地方出身の学生であった。豪雨の影響で、2、3ヵ月「電車が動かなくな」という経験をしていたものの、川が氾濫した地域からは離れており、氾濫や浸水などの被害を受けてはいなかった。だが、台風19号では自分が住んでいる近くの地域で氾濫がおり「人ごとと思えなかった」からと、「⑦被災地との近接性」から災害支援ボランティアに参加していた。

日学3<sup>5)</sup>： 西日本豪雨のときは、川が氾濫したりとかいう感じの地域には近くなくて、今回【＝台風19号】の場合は、(自分が住んでいる)下の川を見たらめっちゃ氾濫してて、家屋とかが浸水して大変だったので、人ごとと思えなかった感じですね。

日本人学生2は、「1年に1回くらいはなんかやろう」と考えていた。前述した教育ボランティアに参加したのは「とりあえず社会経験的にボランティアを何かしようと思」ったからだった。今回の災害支援ボランティアも、茨城で開催される予定だった全国障害者スポーツ大会(いきいき茨城ゆめ大会)のボランティア活動が台風19号の影響で中止になり、「台風のボランティアが来たら台風のボランティアに行こうみたいな」感じで参加をしていた。また、これまでのボランティア経験のない日本人学生4も「高い志を持ってボランティアに臨んだ」というわけではなく、「たまたま来たからそれにたまたま乗ったって感じ」で参加をしていた。つまり、かれらは「⑤援助要請の応諾」から災害支援ボランティアに参加していたのである。

日学2：	教育ボランティアと一緒に、ずっと1年に1回くらいはなんかやろうって思ってたんで、たまたま「ゆめ大会」 <sup>6)</sup> のボランティアがあって、それが台風でダメになって、台風のボランティアが来たから、台風のボランティアに行こうみたいな。
瀬尾：	今回忙しいなかで、災害ボランティアに行こうと思ったのは何か理由があるんですか。
日学4：	たまたまなんですけど、本当に。今まではボランティアが身近に行く機会が本当になかったんです。 <u>たまたま来たからそれにたまたま乗ったって感じですね。高い志を持ってボランティアに臨んだって感じではないですね。</u>

日本人学生1は、当初ボランティア活動に実際に「参加しようかなと迷って」いたものの、台風19号の災害支援ボランティアで活動した「友人の話を聞いて参加したいという気持ちが強くなり」、参加を決めた。

瀬尾：	今回の災害のボランティアにはどうして参加されたんですか。
日学1：	<u>自分の友人がすでに台風19号のボランティアに参加していて、その友人から現場で実際にボランティアの活動をして、テレビとかニュースで見るのとはまた違って、大変さを実感したっていう話を聞いたので、これは貴重な体験や経験になるのではないのかなって思ったのがきっかけです。</u>
瀬尾：	なるほど。別に友だちと話さなければ、興味を持ってはいなかったんですか。
日学1：	そうですね。 <u>参加しようかなと迷ってたんですけど、友人の話を聞いて参加したいという気持ちが強くなりましたね。</u>

友人の影響は他の調査協力者にもみられた。例えば、日本人学生4はボランティアに参加した理由を「たまたま来たからそれにたまたま乗ったって感じ」と述べてはいたものの、それに加え、「部活の友だちもやろうかみたいな話をして」おり、「友だちと一緒にたまたま機会があったんで、行った」とも語っていた。

日学4：	<u>部活の友だちもやろうかみたいな話をしてたんで、その友だちと一緒にたまたま機会があったんで、行った。</u>
------	--

友だちと災害支援ボランティアに参加することには、学生にとってメリットがあったようである。まず、参加前に友だちと話し合い、「情報共有」することで「下調べ」（日本人学生4）や事前準備をすることができていた。例えば、日本人学生4はボランティアに行く前に一緒に参加する友だちと準備や災害支援ボランティアに必要なことを話し合うことができていた。

瀬尾：	（ボランティアに友だちと）一緒に行って、作業とかも一緒にしたんですか。
日学4：	一緒の場所で、同じ作業をしました。
瀬尾：	友だちと行ってよかったことがありますか。あまり関係なかったですか。
日学4：	休憩時間とか、一緒に話したりとかできましたよね。あと、 <u>（ボランティアに参加するための）準備をするときに情報共有もできました。下調べとして、作業に必要なもの。今回は、台風で川が氾濫したっていうことで、家屋とかに土砂がバーっていったっていうのをニュースで見たりしてたんで、長靴を買ったりとか。あとは、破傷風が心配だっていうのもあったんで、長靴の中に釘とかが刺さっても、足に刺さらないような、鉄板みたいなやつも買ったりとか。防じんマスクみたいなのを、【ホームセンター】とか一緒に行って買ったりとか、そういう情報を共有したりしましたね。</u>

また、事前の情報共有だけではなく、活動終了後にバスの中で友だちと話すことで事後のふりかえりも促されていた。日本人学生4は、ボランティアに行く前の事前の「下調べ」で被災した家具を「ゴミ」と呼ばないように配慮したほうよいと思っていたものの、実際の活動では「臭い」と何度も「大きい声で言っ」てしまった。それについて「帰りのバス」のなかで活動に参加した友だちか

ら「ああいうこと言うなよ、気をつけろよ」と言われ「反省」しており、友だちとのやりとりを通して内省が促されていた。

瀬尾：	(ボランティアに) 参加して、よかったことってありますか。
日学4：	スコップの使い方を学んだとか。あとは、被災者の気持ちを考えるっていうのが、難しいなって思いました。
瀬尾：	それはどういうことですか。
日学4：	友だちと一緒に下調べしていくなかで、例えば、汚れた家具とかを、ゴミって言わないとか、そういう配慮が必要みたいなのを (インターネット上に書いてあって)、行く前からそういうことは気を付けようと思ってたんですけど、下水が混じってるから、臭いんですよ。それで、「臭い、臭い」と大きな声で言っちゃったんです。作業しているときは、あまり意識してなかったんですけど、帰りのバスで友だちが「おまえ、ああいうこと言うなよ、気をつけろよ」っていうふうに言ってくれたんで、反省しました。

調査協力者の日本人学生たちは活動を通して充実感を満たしていた。その充実感は、メディアなどで触れる情報だけではなく「実際に見るっていうことに【中略】価値」を見出していたり（日本人学生2）、ボランティアの活動を通して「新しい発見」を得たり（日本人学生4）と、日ごろの生活では得られない体験に対して意義を見出していた。

瀬尾：	ボランティア活動に参加してみてどうでしたか。
日学2：	やってよかったっていうのが大きいですね。
瀬尾：	やってよかったっていうのは、どうしてそう思うんですか。
日学2：	普段見れないところ、実際に見るっていうことにだいぶ価値があったのかなと思います。そういう災害があった場所の現地に行って被害の状況とかを実際の目で見て、(先ほど) 現地の人たちも、明かったっていう話をしましたけど、最初のイメージとは違う印象も体験できたっていうのが大きいのかなと思います。
瀬尾：	結構大変な作業だったけど、楽しいと思われていたようなんですが、どうして楽しかったんですかね。
日学4：	大変だったなかで新しい発見がいっぱいあったんですよ。さっきのスコップの使い方とかもあったんですけど。あとは、蔵の中でかき出す作業が、すごい大変だった理由として、コンクリートが基礎になってる地面だったんですけど、その上にダンボールとかビニールで覆ってあって、その上に土砂が積もった感じだったんで、かき出すっていうのが、大変だったんです。スコップが、ビニールとかダンボールとかに刺さって、地面からえぐるというか、スコップをコンクリートと土の間に滑らして、持ち上げるっていう作業ができなかったんで、結構、大変でしたね。地面に、ダンボールがないところを探して、掘り進めて行くみたいな感じ。そんなもんですかね。

このような経験はかれらの日常の授業やアルバイトなどからでは得られない経験であり、特に「外部の人と関わ」ったり、「自分で能動的に活動する」ことに価値を見出していた。

瀬尾：	ボランティア活動って結構大変な作業だと思うんですけど、それでも参加してよかったことっていうのは何なんですか。
日学3：	自分でも一応 (被災者の) 力になれたっていうのが一つと、 <u>見ず知らずの一緒になった方々と協力して何かをすることができたっていうのがよかった</u> と思います。
瀬尾：	そういうのは大学の授業やバイト、サークルではなかなか得られないことなんですか。
日学3：	確かに、そうかもしれないです。サークルではあんまり外部の人と関わることは少ないですし、授業とかバイトとかだったら、教えられたことを淡々とやっているだけなので、自分で能動的に活動するのは、こういう機会がないとなかなかないと思います。

そして、現時点ではまだ明確ではないものの、ボランティア活動に参加した経験が「今後の生きて

いく一つの基礎になる」のではないかと語る調査協力者もいた。

瀬尾：	ボランティア活動に参加してみてどうでしたか。
日学1：	満足感って言っているのかわからないですけど、なんていうか、住民の方から「わざわざ遠くから来てくださって、ありがとうございます」っていうような言葉をかけていただいたりとか、実際、現場に行ってボランティア体験をする。 <u>ボランティア活動に参加したっていう経験が、何か今後に生きるのかな、どういうふうに生きるかはあまりわからないですけど、でも経験が何かに生きるのかなっていうのを感じたことですかね。</u>
瀬尾：	なるほど。この経験は将来生かせそうですかね。
岩田：	あまりわからないですけど、 <u>何かやったっていう経験が、今後の生きていく一つの基礎になるんじゃないかなと思います。</u>

しかしながら、調査協力者たちがボランティア活動への参加を通して充足感を満たしている一方で、日本人学生3以外は、「スケジュール的に厳し」かった（日本人1）、「忙しかった」（日本人4）、「授業があっ」た（日本人2）というように時間的に余裕がなかったこと、また「交通手段がなかった」（日本人学生4）という理由から、その後のボランティア活動には参加していなかった。

日学1：	2回目以降も参加させていただこうとは多少思ったんですけど、 <u>やはり就職活動とかがあって、スケジュール的に厳しいところがあって。</u>
瀬尾：	また行かなかった理由とかはなにかあるんですか。
日学2：	そこからは普通に授業があって、なかなか行く機会がなかったですね。
瀬尾：	その後参加しなかった理由って、何かあったりしますか。
日学4：	普通に部活ですね。 <u>部活が忙しかったんで。ボランティアって、朝早くのバスに乗って行くしかないみたいな感じだったんで、空いた時間を見つけて行くっていうことができなかったのがありますね。そして、現場に行くまでの、交通手段がなかったからですかね。</u>

### 3.2. 留学生のボランティア参加の目的と経験

次に、留学生のボランティア参加の目的と経験について述べる。調査協力者のうち2名は、自国で「養老院（＝老人ホーム）」や子ども向けのキャンプでボランティアをしたことがあったものの、それ以外の調査協力者はボランティアの経験は全くなかった。ボランティア経験のある調査協力者を含めても、「②好ましい援助・被援助経験」から災害支援ボランティアに参加しているわけではなかった。そして、ボランティア経験のある調査協力者は、以前のボランティア活動には大学進学に有利になるなど、「③利得・損失計算」を考え、活動に参加しているようだったが、今回の災害支援ボランティアには、これまでのボランティア活動参加の有無に関係なく、「③利得・損失計算」から参加している者はいなかった。

留学生6：	<u>養老院へ行って、お菓子とか、食べ物とかをあげたり（すると）、【中略】活動の点数がもらえるから。マレーシアではこういう点数が必要。私立大学は大丈夫、でも、国立大学行くときは、（活動で得られた点数）が必要（になってくる）。</u>
-------	--

また、災害支援ボランティア独自と考えられる「④被災地や被災者への好意的態度」と「⑦被災地との近接性」から、参加したものも皆無だった。

では、調査協力者たちはなぜ災害支援ボランティアに参加したのだろうか。まず、調査協力者の多くは、「命のことだから行かなきゃ」（留学生1）、「人を助けたいんです」（留学生4）など、「①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」から参加していた。

瀬尾：	(ボランティア活動にはこれまでは)「みんなが行かないから恥ずかしいと思った」ということですが、(今回の災害支援ボランティアには)それでも「行くぞ」と思ったのはどうしてなんですか。
留学生1：	えっと、この台風19号のボランティアは他のボランティアとは違うから、今回はえっと、命のことだから、だから、行かなきゃって。
瀬尾：	どうしてこのボランティアに参加しようと思ったんですか。
留学生4：	中国で自然災害を見たことがないんですけど、この台風は(私は)初めて自然災害に対応しました。だから、助けが必要、人を助けたいんです。

そして、「やりがいがあるから」というように「⑥良い気分の維持・発展」から参加する者もいた。

留学生3：	やりがいがあるから。【中略】なんていうんだろう、奉仕の精神ですね。
-------	-----------------------------------

また、台風19号の災害支援ボランティアは、大学からメールが来たり、説明会が行われたりと、大学から積極的に情報が流れており、その情報をきっかけに「⑤援助要請の応諾」から参加する者が多くいた。

【インドネシアの指導教員から日本ではボランティア活動に参加するよう言われた流れから】	
瀬尾：	ボランティアは茨城大学に来てからしてたんですか。
留学生5：	探してたんですけど、情報が無い、感じました。
【中略】	
瀬尾：	情報が、やっぱり今回メールが来て説明会があったから参加したっていうのもあるんですか。
留学生5：	そうです。

調査協力者たちは、これらの高木・田牧(1996)の7つの動機以外の理由からも参加していた。まず、留学生たちは、日本で様々な経験を得たいと考え、参加しているようだった。

留学生6：	日本に留学するとき、いろんな体験が欲しいから。
瀬尾：	いろいろな体験っていうのはどんな体験だったんですか。
留学生6：	最終的な目標は日本語を勉強する。けど、日本の文化はいっぱいあるから【=日本には文化がたくさんあるから】、日本の文化を体験したい。

かれらは、日本のボランティア活動は「日本の独特」なものであると捉えており、ボランティア活動を体験することで日本での新たな経験を得たいと考えていた。

留学生6：	(日本に)来る前、ニュースでいっぱい見た。日本人は自然災害があるなら、すぐボランティアをやる感じ。これはマレーシアと違う。こういう感じのことが知りたいから行ってみようかって。
留学生2：	日本人はボランティア活動に対してすごく熱心してる感じ。中国はちょっと違います。
瀬尾：	それはどう違うんですか。
留学生2：	まず人が少ないし、もう一つはボランティアに対してイメージが違います。ボランティアのイメージは、ちょっとフラフラの人がやる。

その傾向は特に留学の期間が半年から1年に限られた交換留学生に強く、インドネシアからの交換留学生は、日本派遣前に母国の大学の教員から「日本の社会を知るために」はボランティア活動に参加したほうがよいと言われていた。

瀬尾： 今回のボランティア活動にはなぜ参加したんですか。  
 留学生 5： それは向こう【＝インドネシアの大学】の先生に「できればボランティアをしてください」って。  
 【中略】  
 瀬尾： 日本に行く前に言われたんですか。  
 留学生 5： はい、そうです。  
 瀬尾： それはどんなボランティアを先生は言っていたんですか。  
 留学生 5： 何でも良かったです。

そして、留学生たちはボランティア活動を通して、他者とのやりとりをすることに意義を見出していた。交換留学生の二人（留学生 6 と留学生 7）は一緒にボランティア活動に参加し、支援先の家主からレコードや CD などを見せてもらい、日本の歌手について教えてもらったり、お風呂場で自動風呂給湯器や風呂椅子などを見せてもらったりすることで、日本文化に対する理解を深めることに喜びを感じていた。

留学生 6： レコードを、初めて見た。おもしろい。家のご主人はやさしいから、働いたあと、終わったあと、昔のものを出して見せてくれた。  
 瀬尾： ヘー、どんなものを見せてくれたんですか。  
 留学生 6： CD とか、テープとか。  
 瀬尾： え？ CD も？ CD は（見たことが）あるよね。  
 留学生 6： CD は見たことがあるけど、昔の歌手の、見たことがない。【中略】あと、日本のお風呂、めっちゃ和風のお風呂。お湯を入れて、温度そのままできるやつ。ボタンで入るお風呂。  
 瀬尾： あ、お風呂に行ったことないんですね。  
 留学生 6： お風呂行ったことない。その時初めて見た。日本は椅子に座って、シャンプー類は全部低いところにあって。

また、学部・大学院の留学生も、支援先の家主と交流をすることで、自分との価値観の違いに気づくことができ、それがおもしろいと感じる者もいた。

留学生 2： 部屋の中の電気（製品）は全部壊れた。私は最初この電気（製品）を全部出して、掃除してと思ったけど、夫婦二人は写真を先にとって外に置いた。ちょっと私の考えと違います。  
 瀬尾： それはどうして写真を先に置いたんですかね。  
 留学生 2： 記憶が大事。  
 瀬尾： それについて【留学生 2】さんはどう思いましたか。  
 留学生 2： なんだろう私からみればそんな重要じゃないです。写真はいっぱい印刷できるから、写真より電気製品のほうが価値があると思って。でも、それ【＝その価値観の違い】はすごくおもしろいなと思って。  
 留学生 3： 災害のときの（被災者の）気持ちが知ることができたこと。  
 瀬尾： その気持ちってというのは？  
 留学生 3： 行った先の主人と会話をして、向こうは結構明るい人だったんです。大変なことが起きてるけど、明るい感じ。そういう感じは私にはなくて。

そして、大学外から参加した他の日本人ボランティアとのやりとりから日本国内外の他のボランティア活動について教えてもらったりすることに喜びを感じる者もいた。

留学生 3： ボランティアの活動、僕らだけじゃなくて、他のところからも来た人もいないですか。それで一人、おもしろいおじさんを知りました。【中略】その人は結構いろんなボランティア活動をしているみたいで、アフリカで井戸を作ったり、日本でも、たくさんのボランティアをしています。【中略】それがすごいなって思って。

このように調査協力者たちたちは、災害支援ボランティア参加の経験を肯定的に捉えていた。だが、実際に活動に参加するまえは、「(日本語での) コミュニケーションがダメなら迷惑をかけ」てしまう (留学生 2)、「日本人ばかりだと邪魔しちゃう」 (留学生 4)、「自分だけで行くのはちょっと寂しい」 (調査協力者 3) との理由から、参加を躊躇していた。

留学生 2: <u>周りの人が行かないと、ちょっと恥ずかしい。</u> 【中略】 他の人が一緒にいたほうがいいです。
瀬尾: それはどうして?
留学生 2: <u>ちょっと怖いかな、なぜならもし (日本語での) コミュニケーションがダメなら迷惑をかけるじゃないですか。</u>
留学生 4: <u>自分だけで行くのはちょっと寂しいと思う。</u>
瀬尾: やっぱり友だちが行かなかったら、行くのは難しかったですか。
留学生 4: <u>(まわりが) 日本人ばかりだと邪魔しちゃうから。</u>

そのような状況で、かれらの参加を促したのは、ともに参加する仲間がいたからだった。学部・大学院の留学生は全員中国出身の学生であった。かれらは当初参加することを躊躇していたが、中国出身の留学生の一人がソーシャルメディアを通して参加を呼び掛け、それが後押しとなっていた。

瀬尾: あ、みんなが先輩から紹介されたと言っていたんですが、それは【留学生 3】さんだったんですね。
留学生 3: <u>中国留学生の場合は僕の紹介の子が多いですね。</u>
瀬尾: そうなんですね。どうしてみんなに声をかけようと思ったんですか。
留学生 3: <u>これは有意義な活動なので、でも、最初自分だけで行くのはちょっと寂しいと思って。みんなで行こうかなと。</u>

また、交換留学生も参加を躊躇していたが、留学生を支援する活動に関わる日本人学生と説明会で会い、「一緒にやろうよ」と呼びかけられ、他の日本人学生 2 名と一緒に参加することにした。

留学生 5: <u>(説明会の参加者は) ほぼ日本人。だから、どうしよう、やめようかなって、【留学生 6】さんも話して、「微妙」って。</u>
瀬尾: そうなんですね。でも、「微妙」って思ったけどやったのはどうしてなんですか。
留学生 5: <u>そこで、X さん【=日本人学生】に会って、「一緒にやろうよ」みたいな。「じゃ、行こう」って。</u>

しかしながら、災害支援ボランティアに参加したものの、調査協力者たちは全員、「テスト」と「バイト」がある (留学生 6)、「授業がいっぱいあるから」 (留学生 4) などの時間的な要因、ボランティアに行くための交通手段がない (留学生 3)、「周りの人、全部、日本人」 (留学生 2) という理由から、その後のボランティア活動には参加していなかった。

瀬尾: ボランティアは何回行ったんですか。
留学生 6: <u>1 回だけ。実はもう 1 回行きたいけど、その時、テストあるから、あとバイト。</u>
瀬尾: ボランティアはどれぐらい行ったんですか。
留学生 4: <u>1 回だけ。授業が多いので。</u>
瀬尾: (ボランティアには) また行ったりとかはしなかったんですか。
留学生 3: <u>1 回だけ。学校から、バスとかもなしなので、それで行けなかったですね。</u>
留学生 2: <u>次もやりたいけど、みんな (=中国人の留学生) は行かないから、私もちょっと行かない。周りの人、全部、日本人、ちょっと。</u>

#### 4. 考察

調査の結果、日本人学生と留学生ともに、高木・田牧（1996）の7つの動機のうち、②好ましい援助・被援助経験、③利得・損失計算、④被災地や被災者への好意的態度から災害支援ボランティアに参加している者はいなかった。そして、日本人学生が⑦被災地との近接性を感じ参加する者がいる一方で、留学生にはおらず、留学生が①共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容、⑥良い気分の維持発展から参加していたものの、日本人学生のインタビューではみられなかった。

日本人学生と留学生ともに、援助要請の応諾から参加する者が多くいた。日本人学生4が「今まではボランティアが身近に行く機会が本当になかった」、留学生5が「(ボランティアの情報を)探してたんですけど、(それまでは)情報がない、感じました」と述べていたように、災害支援ボランティアに参加するまではボランティア活動に興味を持ちつつも、情報がなく、参加できていなかったのである。だが、台風19号の災害支援ボランティアでは、大学がメールを流したり、説明会を開催したりするなど、積極的に情報を発信したことにより、学生たちもボランティア活動について知ることができていた。

そして、かれらのボランティア活動への参加を促したものは、日本人学生及び留学生ともに友だちの存在だった。日本人学生1が「友人の話を聞いて参加したい」という気持ちを高めていたり、日本人学生4が「友だちと一緒にたまたま機会があったんで、行った」り（日本人学生4）していたように、友だちの存在がなければボランティア活動には参加していなかった可能性もある。留学生は、留学生2が「(日本語での) コミュニケーションがダメなら(周りに) 迷惑をかけ」てしまうのではないかと考えていたり、留学生4が「(周りが) 日本人ばかりだと邪魔しちゃう」のではないかと心配していたように、日本語の非母語話者であることからボランティア活動に参加することを躊躇している姿がみられた。しかしながら、一緒に参加する同郷の留学生や留学生を支援する活動に関わる日本人学生と一緒に参加することで、その心配は解消されていた。東日本大震災の学生ボランティアの参加要因を検討した木野（2014）は、周囲の人の影響がボランティア参加を決意する要因となっていることを指摘しており、本調査でも同様のことが窺えた。特に、日本語を母語としない留学生にとっては一緒に参加する仲間がいるか否かが参加を決定づける大きな要因となっていたといえる。事実、留学生の中には、活動を「次もやりたい」と考えていた者が「周りの人、全部、日本人」、「みんな（＝中国人の留学生）は行かないから、私もちょっと行かない」（留学生2）と参加を躊躇していた。

日本人学生と留学生はともに災害支援ボランティアの活動を通して、日ごろの生活では得られない経験や日々接しない人々と交流することに意義を見出していた。かれらは、メディアなどで触れる情報だけではなく、実際の現場に行き「自分の目で見ることに」に価値を見出し、さらにボランティア活動を通して大学以外の人々と関われることに喜びを見出していた。留学生たちはさらに、日本留学中に様々な経験を得たいと考えており、災害支援ボランティアを「日本の独特」なものとして捉え、参加していた。そして、支援先の家主と交流をすることで、自分との価値観の違いに気づいたり、大学外から参加した他の日本人ボランティアとのやりとりから日本国内の他のボランティア活動について教えてもらったりすることに喜びを見出していた。麻生・松永（2014）は、留学生／留学生の家族と日本人学生の社会参加に対する意識を比較したところ、社会参加において、日本人学生は地域社会の問題を解決することを一義的な目的とする一方で、留学生とその家族は、社会参加を日本文化の学習の場として捉えていたという。本調査で対象とした災害支援ボランティアでも、留学生は日本文化を理解したり、ボランティアに関わる人々と交流したりすることに

ボランティア参加のよさを感じていたといえる。

最後に、調査協力者たちは、日本人学生と留学生含めて、日本人学生3以外、時間的な要因とボランティアに行くための交通手段がないという理由から、その後の活動には参加していなかった。災害支援ボランティアは一過性であるということが指摘されている（渥美他 1995）が、本間（2014）が、災害支援ボランティアの「短期間の濃密な支援は、その後の長期に渡る復興発展を支えることにつながることは少なく、住民に失望を与えかねないことも事実である」（p.58）と指摘するように、一過性にとどまらないボランティア活動を模索する必要があるといえるだろう。

## 5. おわりに

本調査では、災害支援ボランティアに参加した日本人学生と留学生の参加の目的と経験を探り、両者のボランティア参加の目的と経験にどのような違いがあったのかを明らかにした。日本人学生と留学生はそれぞれ災害支援ボランティアに意義を見出していたものの、その後の継続した活動にはつながっていないことが明らかになった。被災地のがれきの除去、清掃、泥だしのような初期段階の支援には継続性は必要がないという声はあるかもしれないが、本間（2014）が指摘するように一過性に留まらない災害支援ボランティアのあり方を検討していく必要はあるだろう。そのためには、ボランティア参加者のふりかえりが重要になってくるのではないだろうか。本調査では、日本人学生4が、災害支援ボランティアに友だちと参加し、ボランティア参加前の「下調べ」を行ったり、ふりかえりが促されている姿がみられた。学生たちに単にボランティアへの参加を促すのではなく、参加した学生同士が災害支援ボランティアの経験について話し合う場を設けるなどして、参加者同士がつながり、ふりかえることで、かれら自身が活動の意義を見出すことができるだろう。そうすることで、その後の継続した参加につながっていく可能性もあるのではないだろうか。

## 謝辞

本研究は、茨城大学令和元年度台風19号災害調査団の一環として行われ、助成を受けた。

## 注

- 1) インタビュー時（2020年6月）の学年。
- 2) 太子町は県のボランティアバス、水戸市は自転車、常陸大宮は大学のバスを使って参加。
- 3) このうち、④被災地や被災者への好意的態度と⑦被災地との近接性は、災害支援ボランティア独自の動機だと考えられている（伊藤 2011）。
- 4) 2018年6月28日から7月8日にかけて西日本を中心に被害をもたらした豪雨。
- 5) 日本人学生。データ部分では紙幅の関係から「日学」と略す。
- 6) いきいき茨城ゆめ大会（第19回全国障害者スポーツ大会）。2019年10月12日から14日に開催される予定だったが、台風19号の影響で中止になった。

## 引用文献

- 麻生迪子・松永典子（2014）「日本人大学生の社会参加への意識—キャンパス周辺に居住する「生活者としての外国人」との比較から」『地域社会統合科学』21(1-2), 59-71.
- 渥美公秀・杉万俊夫・森永壽・ハツ塚一郎（1995）「阪神大震災におけるボランティア組織の参与観察研究—西宮ボランティアネットワークと阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の事例」『実験社会心理学研究』35, 218-231.
- 伊藤忠弘（2011）「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』58, 35-55.
- 茨城県災害対策本部（2020）「令和元年台風19号に係る人的・物的被害状況について（令和2年4月1日現在）」

- <https://www.pref.ibaraki.jp/1saigai/201910/documents/taihuu19higai020401.pdf> (2020 年 11 月 4 日閲覧)
- 茨城大学 (2019)「支援活動の記録 (台風 19 号)」<https://www.ibaraki.ac.jp/hagibis2019/document/index.html> (2020 年 11 月 4 日閲覧)
- 木野和代 (2014)「東日本大震災に関するボランティア活動への参加を左右する要因の検討—宮城県内の大学に在籍する大学生を対象に」『宮城学院女子大学研究論文集』118, 23-42.
- 消防庁応急対策室 (2020)「令和元年東日本台風及び前線による大雨による被害及び消防機関等の対応状況 (第 67 報)」<https://www.fdma.go.jp/disaster/info/items/taihuu19gou67.pdf> (2020 年 11 月 4 日閲覧)
- 高木修・玉木和香子 (1996)「阪神・淡路大震災におけるボランティア—災害ボランティアの活動とその経験の影響」『関西大学社会学部紀要』28, 1-62.
- 東京新聞 (2019)「台風 19 号 久慈、那珂川 12 カ所で堤防決壊」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/11011> (2020 年 11 月 4 日閲覧)
- 本間照雄 (2014)「災害ボランティア活動の展開と新たな課題—支援力と受援力の不調和が生み出す戸惑い」『社会学年報』43, 49-64.
- 松永典子 (2016)「留学生はボランティア活動をどう意味づけているのか—地域社会参加、キャリア形成との関連から」『地域社会統合科学』23(2), 1-11.